天文学とプラネタリウム 第99回

今月のお題

テントウムシと金環日食

日本一高い屋外展望台で眺めた金環日食。自然現象を見て笑顔になれる、幸せなひと時でした。

高梨直紘（東京大学）
平松正顕（国立天文台チリ観測所）

www.tenpla.net

5月21日午前6時、六本木ヒルズ森タワー屋上。日食観察会に参加する200人よりも一足早く海抜270mの屋外展望台に現れたのは、一匹のテントウムシでした。人にくっついて登ってきたのか、はたまた風に巻き上げられたのか。ふらふらと力なく着地した展望台の床にはこれから大勢の人がやってきます。踏まれることを心配した心優しいスタッフが拾い上げて手を高く上げると、テントウムシは空に帰っていきました。しばらくして、屋上には続々とお客さんが上がってきました。大勢の取材陣は、東京タワーやスカイツリーが見渡せる屋上南東側の端に望遠レンズの砲列を作って陣取りますが、空は雲に覆われたまま。新宿のビル群には雲の切れ間から朝日が当たっているのが見え、雲よあと少し動いてくれ！というみんなの願いがさらに強くなっていきます。しかしそんなことはお構いなく、6時19分、太陽が欠け始めました。「雲の向こうですが、日食が始まりました。」アナウンスに呼応するのはたくさんのため息。見えそうで見えない、そんなストレスフルな時間が続きました。

雲の切れ目から太陽が顔をのぞかせた時には、4割ほどが欠けた姿でした。一斉に歓声が上がり、各自日食グラスを手に顔を上げます。2009年には日食グラスがあまり行きわたっていなかったような印象を持っていましたが、今回は「こんなにたくさん種類があるのか」と思うくらい様々な日食グラスが活躍していました。その後も雲の薄い部分と濃い部分が交互に太陽に覆いかぶさり、そのたびにみんなで一喜一憂。しかしこれは、一緒に見ている人の一体感を醸成するのに一役買う心憎い演出の役割を果たしたようでした。快晴の中で淡々と食分が大きくなっていく状況だったとしたら、これほどの一体感は生まれなかったかもしれません。

そしていよいよ金環の開始時刻。アストロアーツのiPhoneアプリをもとにカウントダウンする案内人の声に、お客さんたちの声が重なります。カウントゼロのその時、ちょうど太陽は雲の薄い部分へ。一気に歓声が上がり、メディアのカメラマンたちもあわただしく太陽や人の顔を撮っていきます。5分間の金環食が終わった時には、みんな笑顔でした。絶妙な演出を見せてくれた太陽と月と地球のその雲に、拍手。

イランのテレビ局 Press TV に取材を受ける筆者（平松）。天岩戸伝説を20秒の英語で説明するのは大変。

今回の観察会は、天プラがこれまで森ビルと協力して行ってきた六本木天文クラブの一環。場所柄、普段の観望会でも海外の方をよく見かけますが、今回は台湾やイランからも取材陣が来ていました。この2社とも、インタビューで質問が出たのは天岩戸伝説。天照大神が岩の後ろに隠れてしまったというエピソードは日食を模したものとも言われ、海外の人たちも興味を持っていたようです。

さて冒頭のテントウムシ。お天道様の名を持つこの虫を助けたから金環日食が雲間から見えたという新たな神話が、スタッフの頭に浮かんだとか浮かばないとか。日食を見た皆さんの中には、どんな物語が残りましたか？